

今週のメニュー

■トピックス

◇第1回樹脂窓リサイクルシンポジウム開催

■随想

◇ららら、プラスチック (15) 新聞の整理袋がプラスチックに

元 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

■トピックス

◇第1回樹脂窓リサイクルシンポジウム開催

樹脂窓リサイクル検討委員会(委員長:東京大学 大学院 清家剛教授、事務局:VEC、(一社)日本サッシ協会、樹脂サッシ工業会)(以降、検討委員会と称す)は2024年1月9日に、樹脂窓リサイクルビジョン(以降、ビジョンと称す)を外部発表しました。全国の新築戸建て住宅用の2023年度の普及率は樹脂窓で約33%、アルミ・樹脂複合窓で約63%(2022年度はそれぞれ、約29%、約63%)と着実に増加していると見られ(※1)、樹脂窓リサイクルの取組みが、益々重要になってきます。社会実装に向けステージを上げて活動する段階にきましたので、80年代より樹脂窓の普及が始まっている北海道内のビルダー、解体事業者、収集運搬・中間処理業者および再生処理業者など、樹脂窓に関連するステークホルダーに広く樹脂窓リサイクル活動を認知していただくと共に、リサイクルシステムを構築する上で重要となる回収ネットワークの強化を目的として、2024年9月10日、札幌市で第1回樹脂窓リサイクルシンポジウム(以降、シンポジウムと称す)を開催致しました。

(※1) 住宅用建材使用状況調査報告書(1993~2023) 一般社団法人 日本サッシ協会

冒頭、(一社)日本サッシ協会の宮村専務理事から開会の挨拶、続いて、経済産業省 北海道経済産業局 資源エネルギー環境部長の豊島厚二氏から来賓のご挨拶では、「本シンポジウムは回収段階の仕組みづくりや新たな事業展開のきっかけになりえる、樹脂窓の普及率が高い北海道が先進地となって産官学関係者が一致団結することでリサイクルシステムが社会に構築されて、再生原料を使用した窓to窓リサイクルが実現することに期待している」と述べられました。シンポジウムは3部構成で、第1部は検討委員会およびご協力いただいている事業者からの活動紹介、第2部は、道内のビルダー、廃棄物処理事業者および行政から、それぞれの環境への取り組みについてのご講演、第3



豊島 厚二 様

部は、パネルディスカッション形式で樹脂窓リサイクルの社会実装における課題と対策について意見交換を行い、最後に VEC の小野専務理事の挨拶で閉会しました。それぞれの内容について、概要をご紹介します。

第 1 部では、まず検討委員会の清家委員長（東京大学 大学院 教授）から基調講演として、検討委員会発足の経緯と現在に至るまでの取り組み内容、更に外部発表したビジョンの主旨について紹介いただきました。次いで、使用済み樹脂窓の回収にご協力いただいている株式会社西武総業（本社、札幌市）取締役営業部長の高橋佳雅氏から樹脂窓解体の実例について、また再生原料化でお世話になっている日本資源技術株式会社（同、北広島市）代表取締役の宮本政博氏から、異物選別除去プロセスの開発状況について、それぞれご紹介いただきました。第 1 部の最後は、磯部主査（武蔵野大学 工学部 准教授）から、リサイクルシステムの仕組み作りにおける課題を提起していただきました。

第 2 部では、（一社）北海道ビルダーズ協会 代表理事の菊澤里志氏からハウスメーカーや工務店の ZEH および廃棄物処理の取り組みについて、次いで、建設廃棄物協同組合北海道支部 支部長の阿部淳氏から建設廃棄物処理を取り巻く状況とリサイクル推進のために必要な対策に



シンポジウム会場の様子

ついて、最後に北海道 環境生活部 環境保全局 循環型社会推進課 課長補佐の吉田裕氏から樹脂窓に係る廃棄物処理の現況および今後の事業推進を見据えた関係法令をご紹介いただきました。

第 3 部は、使用済み樹脂窓リサイクルの社会実装における課題と対策をテーマとして、講演者に登壇いただき、パネルディスカッションを行いました。樹脂窓リサイクル推進に不足している事とは？ という清家委員長からの問いかけに対して、高橋氏から「仕組み作りが不足している、効率的な分別方法があれば前向きに進めることができる」、宮本氏からは「異物の有無がプロセス稼働率を左右する、持ち込む前の段階で除去できれば効率が上がる」、阿部氏からは「現時点では、量が不足していると思われる、異物・付着物を如何にして除去するか、そして除去後の受入基準が必要」と、各々の事業の観点からご見解をいただきました。こうした意見を踏まえ、磯部主査から「受入基準が明確になれば解体や中間処理業者に具体的な形で依頼できるので、最適な形で再生事業者を持ち込む策について今後検討していく」と提案されました。

更に、仕組み作りの上での注意点は？ という問いかけに対して、吉田氏から「収集運搬の効率を上げることが大事、さもないと環境面でマイナスになる恐れがある」との

ご見解をいただきました。

リサイクル材を用いた商品はユーザーに受け入れられるか？ という問いかけに対しでは、菊澤氏から「エンドユーザーはコストにシビアだが、これからの家づくりには使用後のリサイクルまで考えることが必要なんだ、と啓蒙していくことが求められている」と述べられました。



パネルディスカッションの様子

最後に清家委員長から「先進地のドイツの様に、究極的にはユーザーがリサイクル品しか選べない状況が理想。ただし、樹脂窓の解体については建物の性能が上がり、より頑丈になっていくので、易解体化を設計に組み込むのは難しい。やはり、後処理工程・技術・設備で対応していかざるを得ないと思われる」とし、社会実装に向けた今後の方向性を示されました。

ご講演いただいた方々の見事な時間管理とパネルディスカッションでの清家委員長の巧みな司会進行のおかげで、4 時間近い（13:15～17:00）プログラムは、全てがほぼ時間通りに無事に終わることが出来ました。参加人数は、会場 61 名、Web25 名、計 86 名でした。

今回のシンポジウムを通して、現時点では埋立て処理されている樹脂窓がリサイクル可能である事を廃棄物処理事業者様に認知していただけたと思います。また、ステークホルダー間の連携が不可欠である事や受入れ基準の明確化など、主たる課題を共有化する事もできた事は大きな意味があり、その 1 歩として今後の進展につなげて行きたいと思います。

最後になりますが、本シンポジウムでご挨拶、ご講演、ご登壇いただいた方々、および会場の事前準備と進行および受付等でご協力いただいた東京大学 清家研究室、武蔵野大学 磯部研究室の学生の皆様、誠にありがとうございました。

◇ららら、プラスチック (15) 新聞の整理袋がプラスチックに

元 日本プラスチック工業連盟 専務理事 岸村 小太郎

最近「ニュースはネットで」という若い世代が増えているようだが、我が家では相変わらず新聞を定期購読している。そして、月に1~2度、古新聞回収のための袋（新聞整理袋）が新聞と一緒に配達される。この袋はこれまでは紙製だったが、先月からプラスチック製の袋に代わった。材質はポリエチレンで、再生材を40%使用と表示されている。

「プラスチックから紙等の天然素材へ」という最近の流れには逆行しているので興味を惹かれた。そこで、切り替えの理由や、気になる点をいくつか調べてみた。

まず、新聞販売店に「プラ製の袋に切り替えたのは新聞社の指示によるものなのか」と尋ねたところ、販売店の判断によるもので、紙の価格が上昇していることがその理由とのこと。コスト削減のために紙製袋への印刷を止めたが、それでも追いつかないと言う。そういえば、紙製の回収袋もかつてはカラー写真等の広告が入ったカラフルなものだったが、いつの間にか無地・無漂白のクラフト紙に代わっていた。

次に気になったのは紙のリサイクルへの影響だ。紙製の袋であれば、新聞紙と一緒にリサイクルできるが、プラ製の場合、新聞紙と分けなければリサイクルを阻害することになる。

私が住むS市では、家庭ごみとして集積所に新聞紙を出す際には、紙ひもやプラスチックひも（市報等では「ビニールひも」と表記されている・・・）で括って出すことになっている。であれば、プラ製袋もプラひもと同様の扱いが可能なはずなので、S市の家庭ごみを受け入れている衛生組合にその点を確認したところ、「市で収集された新聞紙は、市が委託している古紙再生事業者に直接搬入されているため、プラひもがどう処理されているかは不明」とのことだった。

そこで、市で収集した新聞紙を受けて入れている古紙問屋を調べ、新聞紙を括っているプラひもやプラ製の整理袋の扱いについて尋ねたところ、残念ながら「産廃として処理している」との回答だった。

プラ製の整理袋が新聞紙のリサイクルの障害になっていないことは確認できたが、産廃として処理されてしまうのはもったいない。古紙回収業者に、「夾雑物」としてのプラスチック製のひもや袋のリサイクルへの取組みを期待するのは無理なことかも知れないが・・・。

今後、プラ製の整理袋が普及することになった場合は、プラスチックのリサイクラーからのアプローチを期待したい。

なお、前述の衛生組合では、「（市の収集ルートではなく）衛生組合に直接搬入された新聞紙の場合、それを括っているプラひもは分別して、資源プラスチックとして

再生事業者に引渡ししている」とのことだった。

ところで、件のプラ製整理袋には Made in Vietnam と表示されている。そして、冒頭で紹介したように再生ポリエチレンが 40%使用されている。

2018 年に中国が廃プラスチックの輸入を全面的に禁止したことを受け、中国に代わる廃プラスチック受け皿である東南アジア諸国では急激な輸入量増加を問題視し、規制が進んだ。ベトナムも 2018 年 6 月に廃プラスチックの輸入を一時停止し、同年 9 月に新たな国家環境基準が通知された。この基準では、生産プロセスで発生した未利用のプラスチック（格別品や工程端材等）は輸入可能とされている。

また日本では、2019 年に廃プラスチックが新たにバーゼル条約の規制対象に追加されたことを受け、2020 年に「プラスチックの輸出に係るバーゼル法該非判断基準」が環境省によって定められ、汚れや異物混入のないきれいなものは規制の対象外とされ、輸出可能とされている。

2023 年には、日本からベトナムに 16 万トンの廃プラスチックが輸出されている。これは 19 万トンのマレーシアに次いで 2 位。

私の手元にある新聞整理袋は無色・半透明できれいな外観であり（写真）、再生材もきれいなものが使われていることが分かる。そして、その再生材は、日本から輸出された廃プラスチックではないだろうか、と私は考えている。



写真 プラスチック製の新聞整理袋

さて、[前回の連載 14 \(No.778\)](#) では、パッケージの台紙を紙からプラスチックに代えた歯ブラシのことを取り上げたが、その後メーカーの方から「台紙をプラスチックに代えたのは、加工時のコスト削減が目的」との回答を頂いている。

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <https://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp